

## 滋賀・三堂遺跡

ぎんどう



(近江八幡)

調査は三ヵ所のトレンチ  
調査地は、野洲町北部の家棟川と中ノ池川に挟まれた扇状地に位  
置する富波甲集落の北西、  
県道大津能登川線西側の低  
湿地（田畑地）に所在する。  
周辺には、野洲町の歴史を  
考える上で重要な五ノ里・  
常楽寺・富波・野々宮・上  
永原などの遺跡が点在して  
いる。

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、野洲町北部の家棟川と中ノ池川に挟まれた扇状地に位  
置する富波甲集落の北西、  
県道大津能登川線西側の低  
湿地（田畑地）に所在する。  
周辺には、野洲町の歴史を  
考える上で重要な五ノ里・  
常楽寺・富波・野々宮・上  
永原などの遺跡が点在して  
いる。

8 調査地は、野洲町北部の家棟川と中ノ池川に挟まれた扇状地に位  
置する富波甲集落の北西、  
県道大津能登川線西側の低  
湿地（田畑地）に所在する。

9 呪符は桶外北脇に差し込むような状況で出土した。桶内出土の木製  
品は桶の部材とみられる。漆椀は無紋で外面黒漆塗り、内面赤色漆  
塗りである。この漆椀内残土に数珠三点と金箔片が遺存していた。

- 所在地 滋賀県野洲郡野洲町大字富波字三堂甲
- 調査期間 一九九六年（平8）七月～一〇月
- 発掘機関 財元興寺文化財研究所
- 調査担当者 岡本広義
- 遺跡の種類 集落跡
- 遺跡の年代 弥生時代～古墳時代、平安時代末期～江戸時代初期
- 遺構の概要

10 計四五一〇m<sup>2</sup>について実施した。検出遺構は掘立柱建物・井戸・土坑（墓壙を含む）・素掘り溝・自然流路などである。これらの遺構は一部、古代以前の遺物を検出したものもあるが、その大半が中世初頭から近世初頭までのものである。特に第一トレンチの遺構検出状況は特徴的で、流路辺の居住区とその造営時期に相違があるものの、素掘り溝で区切られた墓域が存在する。居住区の掘立柱建物は、付属する井戸や土坑の出土遺物から一三世紀から一四世紀頃とみられる。素掘り溝東側（墓域）で検出した土坑群（SK〇一および〇三～〇四）は、遺構の上部構造を後世の削平で失っているが、それぞれの残存構造物や出土遺物（五鉛杵・銅錢・供膳具など）からみて葬送に関わる遺構と考えられ、形状の異なる掘形や木製の枠で区画するよう据えられた検出状況であった。これらの墓壙群は検出状況からみて火葬に伴うもの（SK〇一・〇三～〇八・一〇～一四）と土葬に伴うもの（SK〇九）に分けることができる。

11 今回報告する呪符は、SK〇九の土葬墓と考えられる遺構から出土した。一辺約一・〇mの隅丸方形状土坑に、上部を消失する残存高〇・三m底径〇・五七mの桶が据えられていた。桶内からは加工痕のある木製品数点と漆椀・数珠片・人骨片と歯数点が出土した。

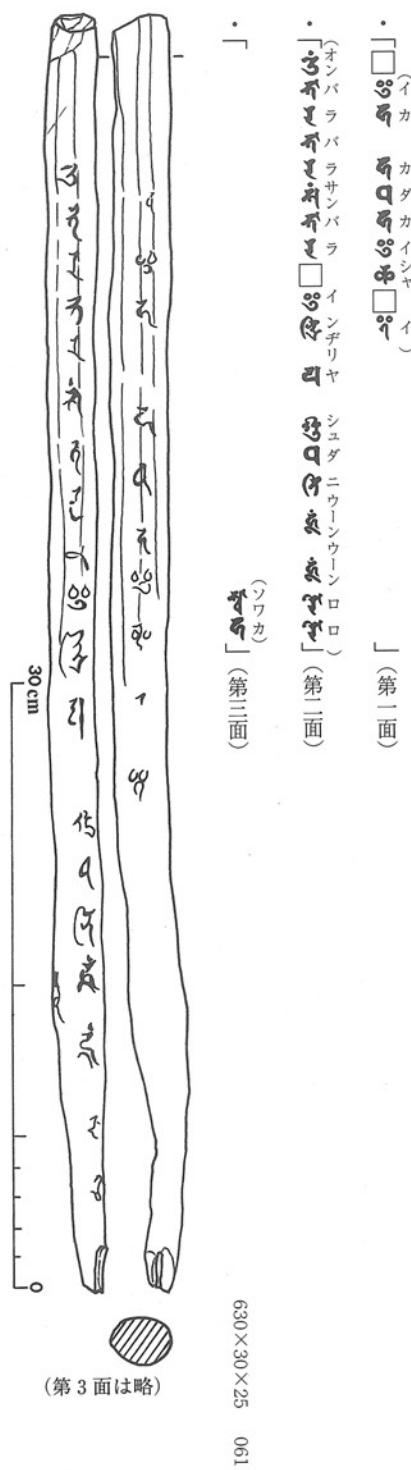
## 2002年出土の木簡

この呪符は細長い丸木で、枝もしくは細い立木の皮を剥ぎ取つただけのようである。頂部は中高に削り出し、下端は細く尖らせてゐる。形状からいわゆる「生木塔婆」の範疇にあり、「杖型塔婆」といわれるものである。断面形状は橍円を呈しており、墨書の梵字が四面中三面、計三行にわたり認められた。今仮に墨書の残る三面を時計回りに第一から第三面と呼ぶことにする。

第一面には「イ」や「カ」らしき梵字が繰り返してみられる。これらは通常、六地蔵菩薩や地蔵菩薩の種子として用いられる例が多くある。しかし、その並びは不規則であり実態は不明である。あえて六地蔵菩薩関係の種子としてみると、六地蔵菩薩の種子には数例

の組み合わせがあることから、それを組み合わせて墨書したと  
考えられる。(2)

第二面は一九文字の梵字を縱方向に記しており（）あるべき箇所は墨痕が残らない）、その梵字の組み合わせから「隨求小呪」または「一切如來隨心真言」といわれる真言とみられる。しかし、全文はこの行で完結しておらず、左行に続いている可能性もある。「隨求小呪」とは、大隨求菩薩の真言陀羅尼で、光明真言とともによく用いられている。大隨求菩薩は曼陀羅中で表現される尊像で、胎藏界曼陀羅中の蓮花院中央最上段に位置している。「五根清淨にして衆生の保護者よ、二執を離れて衆生の求願に隨いて動くもの



よ」という意の滅罪息災の真言である。

第三面にも梵字の墨痕がみられるが、ほとんど消えており内容は不明で、わずかに「ソワカ」の二字が下部に残るだけである。「ソワカ」は多くの真言の文末に用いる語句で、成就を祈るという意味である。但し、第二面からの続きなのか、第三面上部からの続きなのかは不明である。もし第二面の文末に直接続くものでないとすれば、その位置から第三面には五一五字程度の梵字が記されていたと考えられる。

以上の梵字はいずれも葬送に関わるものである。六地蔵菩薩は墓地の入口に立ち死者を迎える存在であり、随求小呪も墓地の入口の造立物や供養碑にみられるものである。要するに、六地蔵菩薩および随求菩薩の功德により、六道（天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄）に迷わず、諸々の苦難を免れ無限の罪を解くという意味合いをもつもので、SK〇九の被葬者の極楽往生を願い桶脇に差し込まれたのであろう。

#### 9 関係文献

（財）元興寺文化財研究所『三堂遺跡発掘調査報告』（一九九七年）

（岡本広義）

第三面にも梵字の墨痕がみられるが、ほとんど消えており内容は

木簡学会が創立一〇周年を記念して一九九〇年に刊行した『日本古代木簡選』が復刊された。これは一九八七年度まで（一部一九八八年度を含む）に全国で出土（伝世品を含む）した古代の木簡のうち、六六遺跡の五三三一点の木簡について、遺跡ごとに釈文と解説を収録し、写真を掲載したものである。

解説の執筆は、石上英一・今泉隆雄・加藤優・鬼頭清明・倉住靖彦・栄原永遠男・佐藤宗諱・杉本一樹・東野治之・平川南・山中敏史・和田萃の各氏の分担による。また、木簡総論として、狩野久「古代木簡概説」、平野邦雄「木簡と古代史学」、田中琢「木簡と考古学」、佐藤信「木簡研究の歩みと課題」を収める。木簡研究の到達点として、また今後の研究の原点として、常に参照されるべき内容となっている。

なお、復刊にあたって誤植の他、左記の図版の誤りを正した。少部数の復刊であり、お求めはお早めに。

166 369 495 ……表裏のレイアウトの誤りを訂正

267 ……裏面にレイアウトしていた別の木簡を削除

B四版 卷頭カラー図版二頁、モノクロ図版八五頁、解説  
ほか一六六頁 岩波書店刊 定価一八〇〇〇円（税別）

#### 木簡学会編『日本古代木簡選』の復刊